

歯茎の骨再生医療 東大、来年に臨床研究 インプラントに対応

東京大学医科学研究所の各務秀明特任准教授らは、歯茎の骨を再生する臨床研究を2011年初頭にも始める。歯周病などで傷んだ骨を再生させるインプラント(人工歯根)の埋め込みなどの歯科治療の実現を目指す。このほど学内の倫理委員会の承認を受けた。厚生労働省への手続きを急ぐ。

臨床研究で再生を目指すのは歯槽(しそう)骨と呼ぶ骨。歯周病などによってこの骨が傷んでいると、インプラントを埋め込めない。現在は患者自身の腰の骨を削り取ったり、人工骨を用いたりして移植しているが、全身麻酔や費用の面などで患者負担が大きい。

臨床研究ではまず、患者に部分麻酔を施して骨髄にある細胞を採取。そこから適切な細胞を選んで培養し患者に移植する。15人の患者で安全性と有効性を確認し、その後10人で検証する。

細胞の培養条件や骨になりやすい細胞の選別法も開発済み。治療に使う細胞は、ベンチャー企業のTESホールディングス(東京・文京)の支援を受けて学内に建てる施設で培養する。東大チームは試験的に同様の細胞移植を10人に実施し、安全性を確認している。